

《書 評》

A. J. S. Spawforth, *Greece and the Augustan Cultural Revolution*

Cambridge: Cambridge University Press, 2012, Pp. viii + 317.

桑 山 由 文

1

著者の A. J. S. Spawforth は、P. Cartledge との共著である *Hellenistic and Roman Sparta: A Tale of Two Cities*, 1989 (2nd ed. 2002) をはじめとして、多数の論考を著してきた帝政期ギリシア研究の第一人者として名高いが、それだけでなく、*The Oxford Classical Dictionary* の第三版や、*The Court and Court Society in Ancient Monarchies*, Cambridge, 2007 の編者の一人でもある。本書は、そのように幅広い分野で活躍する著者が、ローマ期ギリシア本土について初めて書籍として本格的に世に問うたものである。アウグストゥスによる元首政成立で生じた、ローマ帝国中央での政治面および精神面での「革命」が、属州となっていたギリシア本土、さらには当時のギリシア文化のあり方にいかなる影響を及ぼしたのかを考察する。全体の構成は以下の通りである。

- 1 Introduction: Greece and the Augustan age
- 2 'Athenian eloquence and Spartan arms'
- 3 'The noblest actions of Greeks'
- 4 'The gifts of the Gods'
- 5 'Constructed beauty'
- 6 'Hadrian and the legacy of Augustus'
- Conclusion

第1章で著者は本書の青写真を提示する。A. Wallace-Hadrill や K. Galinsky らによる近年のアウグストゥス研究の成果を詳述しつつ、アウグストゥスが権力を掌握し、安定化させるにあたって、ローマ人の *mos* (先祖伝来の慣習) および *virtus* (美德) の回復、「古き良き」ローマへの回帰を前面に打ち出し、これが伝統的男性原理の強調にもつながったこと (*virtus* の本来の意味は「男 *vir* らしさ」) を指摘する。その上で、著者は、アウグストゥス

政権によるこの尚古主義政策が、共和政末期以降のローマ人のギリシア文化に対する意識変革を促し、独特のギリシア文化観の形成につながっていったと論じる。すなわち、ローマ人は、ギリシア文化を自身の文化的アイデンティティの一部とする一方で、同時代のギリシア文化圏の悪影響が共和政ローマの退廃をもたらしたとも考えていた。尚古主義の高まりは、こうした同時代のヘレニズム文化を女性的として拒絶し、過去、とりわけ古典期のギリシア本土の文化こそをローマ人の *virtus* に適合する、「真の」ギリシア文化として理想化する動きとなった。これは、ローマ帝国こそがギリシア文化の真の後継者であるという支配の正統化にもつながる。そこで、アウグストゥス政権はこの新たな価値基準をギリシア本土へ当てはめ、ギリシア文化の形を変えようとした。その「ショーケース」が、アクティウムの勝利を記念して建設された都市ニコポリスであった。以上のように著者は議論し、さらに、このローマ的ギリシア文化観が、首都ローマだけでなく、ギリシア本土の諸都市の有力者層にも共有されるようになったことに注意を促す。支配者であるローマ中央とのつながりの強化を求めた彼らは、この新たな価値観を受け入れ、それに合わせて、自身の都市を「復興」していったのである、と。

この第1章に著者は本文約270頁のうち60頁弱を割き、アウグストゥス帝期におけるローマ中央の変容とそれに伴うローマ的ギリシア文化観の成立、そのギリシア本土への浸透という、本書の理論的枠組みを構築する。第2章以下は、この図式に基づいた諸テーマを提示し、それに関して諸史料を丹念に分析することで、ギリシア本土がどのように変容したのかを具体的に浮き彫りにしていくという構成となっている。

第2章は、こうしたローマ的ギリシア文化観において最重視される二つのポリス、アテネとスパルタを取り上げる。アテネについては、アグリッピエイオン（アグリッパの音楽堂）を主とする、アウグストゥスのアゴラでの建築事業について検討し、この場所が本来の性格を奪われ、古典期アテネを称揚する諸建築物で満たされた一種の「博物館」と化したことを描き出す。一方、スパルタについては、軍事的伝統の復興が主題である。ローマ人にとってスパルタの尚武は基本的には尊ぶべきものであったため、この地ではとりわけローマの *virtus* との重ね合わせが進展した。その典型が、ローマ側の主導による「共同食事の制」や鞭打ちの儀式などの古のスパルタ風訓練の復活であった。

このように著者は、アテネとスパルタがローマ的ギリシア文化観によって変えられていくことを活写するも、それと同時に、こうした「復興」が、パンメネスやエウリュクレスといった都市有力者層の価値観とも合致する側面が大いにあり、彼らによって支えられもしたこと、アテネでもスパルタでも、多くのローマ人上層が訪れて都市有力者層と交わり、ローマ風ギリシア文化の発信地となったことを指摘する。

第3章は、この二つのポリスが中心的役割を果たした前5世紀のペルシア戦争とその表象に注目する。アウグストゥス帝期のアテネ、スパルタ、さらにプラタイアイにおいてペルシア戦争を記念する、どのような動きがあったのかを検討し、この戦争に、アテネとスパルタ

の古い *virtus* を具現化するという新しい役割が与えられたことを示す。加えて著者は、ギリシア本土に対するアケメネス朝ペルシアというイメージが、アウグストゥス帝期ローマ帝国に対するパルティアのそれと重ね合わされたことにも注意を喚起し、ペルシア戦争を記念することには、ローマ帝国が地中海の新たな支配者として、古のアテネとスパルタの立場、つまり、「蛮族」から「文明世界」を守るという立場を継承したと喧伝する意図も込められていたことを明らかにする。

第4章は、アウグストゥスがギリシア本土の諸都市の宗教儀礼に与えた影響を広く考察する。まず著者は、アウグストゥス帝期よりも前の状況に触れる。もともとローマの国家宗教がギリシアの神々への信仰と密接に関わっていたこともあり、共和政末期には既にローマ人のギリシア本土の宗教への関心は深く、ギリシア本土人との交流の中で好古的関心が強まっていたと指摘する。それを踏まえた上で、著者はその傾向が、アウグストゥス帝期以降——アントニウスを凌がねばならないという彼個人の事情も加わって——さらに深まっていったことを膨大な事例から論じていく。それゆえ、本章には60頁強ととっても多くの頁が割かれている。そうして著者は、ギリシア諸都市の有力者層が、ローマ的ギリシア文化観に従って、どのように古の儀礼や神官団を復興していったのか、また同時に、そうした儀礼をローマ中央の支配層との意思疎通の手段としていかに利用していったのかを、様々な都市のゲルーシアやスパルタの儀礼参加者リスト、エレウシスの改革など広範囲にわたる事例の分析から示していく。

第5章では、宗教的側面以外の建築事業が主題となる。アウグストゥス帝期以降、ギリシア都市がローマ的要素も併せ持つようになり、特にその整備具合が都市の美しさの基準となったこと、そうした整備には、ローマ皇帝やローマ人の関与が辺縁の都市においてさえも確認され、さらには、都市有力者層のローマ帝国への高い忠誠心を示すという側面もあったことを、メッセニア、アテネ、スパルタ、オリュンピア、マンティネイアの事例から論じる。

第6章では、アウグストゥス帝期の「遺産」が、ローマ中央からの干渉が薄れていくティベリウス帝期以後を経て、2世紀初頭のハドリアヌス帝期にいかに継承されるのかを、著者が近年論考を著してきたパンヘレニオン都市同盟を中心に検討する。この同盟の性格が、アウグストゥス帝期と同じく、ローマ中央が定義するギリシア文化観に従って、ギリシア文化圏の諸都市を位置付ける、たとえばギリシア的アジアをギリシア的ヨーロッパ、とりわけアテネの下に置くというものであったことを指摘し、ハドリアヌスのギリシア世界への態度は、アウグストゥス期ローマのギリシア文化観を引き継ぐものであったことを示す。加えて、著者は、当時政治的経済的に繁栄していた小アジア諸都市にはこうした価値観への反発があったこと、また有力者層による、自都市をローマ風ギリシア文化観に適合させる行為には、儀礼や建築活動への高額な投資が伴ったのであり、それが財政状態の悪化や都市中下層民との対立につながった可能性にも言及する。

Conclusion では、本書の流れを概観した後、著者がローマ期ギリシア本土の歴史の第二段

階と見なすハドリアヌス帝期以降の状況について元首政期を中心に簡単に述べ、今後の課題として、本書が構築した枠組みの下で帝政期におけるギリシア有力者層のアイデンティティを再検討することの必要性を提示して、本書を締めくくる。

2

本書の目的は、従来、前2世紀にローマ属州となってからは衰退したと見なされがちなギリシア本土が、実際はローマ中央と密な交流を行っており、アウグストゥスによる元首政開始に伴い、中央の文化的規範に歩調を合わせることによってさらに新たな活力を得たのだと、その史的意義を明らかにすることにある。そのために著者は、ギリシア本土のさまざまな都市の事例を取り上げて、都市有力者層の経歴や宗教儀礼などに関する夥しい数の碑文から、キケロの弁論などの一見ギリシア本土に直接関係しなさそうな文献史料にいたるまで、諸史料を網羅的に扱い、関連する諸々の研究史にも幅広く言及し、じっくりと検討していく。それにより、著者の主張は圧倒的説得力をもって読者に迫ってくる。

中でも本書の議論の特徴は、第一に、ローマ期ギリシア本土の都市有力者層が、ローマ中央への進出に乗り気ではなく、古典期という過去の理想に逃避していたという、従来支配的な見解に正面から反対し、市民権拡大やローマ風の名の使用などの事例から、彼らがむしろ、他の被支配地域の都市有力者層と同じく、ローマ中央との関係強化にまい進していたことを詳述したことにある。いわば、現代の研究者によるギリシア本土人の「理想化」に釘を刺すのである。

第二の特徴は、アウグストゥス帝期におけるギリシア文化変質の要因として、ローマ中央からの文化干渉を大前提としつつも、ギリシアかローマかの二者択一に陥ることなく、両者の交流と対話を重視すること、さらにそれらを媒介する存在として、従来こうしたテーマの研究ではほとんど取り上げられることのなかった、ローマやイタリアからの植民者とギリシア知識人層とを本格的に議論の俎上に載せた点にある。すなわち、著者は、属州では植民者たちが中央とのパイプや価値観の伝達役として大きな影響力を持ち、首都ローマではギリシア知識人の流入と活躍が増大したこと、こうした文化混淆の下で成立したデクラマティオが、首都やギリシア本土においてローマ的ギリシア文化観を浸透させたことの意義を強調する。そのように、ヘレニズム史とローマ史の狭間でマージナルな存在として見過ごされてきた、あるいはギリシア文化と無関係と思われてきた要素に光を当てることで、共和政末期からアウグストゥス帝期にかけてローマとギリシアの価値観の一体化が進行する過程を解き明かすことに成功している。

もっとも、ギリシア本土の歴史におけるアウグストゥス帝期の意義を強調する著者の姿勢は、同時に短所ともなる危険性をはらんでいる。本来、本書の意図は、アウグストゥス帝期以後もギリシア本土が大きな活力を有し続けたと示すことにある。ところが本書の議論の多

くは、アウグストゥス帝期より後の時代の史料を扱って考察する場合でさえも、結論が時代を遡ってアウグストゥス帝期に収束してしまう傾向が強い。その結果、全6章のうち、ハドリアヌス帝期中心の第6章を除く残り5章分全てがアウグストゥス帝期のみを対象としているという印象を受けてしまう。裏を返せば、著者はアウグストゥス帝期より後のギリシア本土の史的展開に端々で触れつつも、その全体像を十分に描こうとはしない。それゆえ、アウグストゥス帝期に基本的枠組みができあがった後、ギリシア本土は沈滞していったとのイメージを読者に与えかねないのである。もちろん、アウグストゥス帝期の意義を説くことが本書の主たるテーマではある。だが、おそらく著者の意図を超えて、その命題が強力に機能しすぎてしまっているのである。

この印象をさらに強めているのが、フラウィウス朝期後半からトラヤヌス帝期にかけてのアテネの状況への言及がまったくない点である。トラヤヌス帝はアウグストゥス以後では初めてアテネを訪問した皇帝であり、彼の時代にはパルティア戦争が、本書の重視するペルシア戦争と重ね合わされ、宣伝された。また、しばしば触れられているヘロデス・アッティクスの家系が勢力を回復させ、ヘレニズム王家の子孫であるフィロパップスが文人のパトロンとして活動し、墓廟を建設するなど、アテネを中心にギリシア本土をめぐる状況が活発化する時代でもあった。これらのような、帝政期ギリシア本土がアウグストゥス帝期より後も活力を失っていない事例がさらに付け加えられていれば、上述のような印象は緩和されたのではないか。ただし、こうした構成上の問題は、ハドリアヌス帝期の分析がパンヘレニオン都市同盟に限定されていることを考慮すると、続編の執筆を念頭に置いた、意図的なものであるのかもしれない。いずれにせよ、五賢帝期を中心に据えた続編の登場を大いに期待したい。

ローマ時代のギリシア文化については1980年代から考古学、文学などさまざまな側面で研究が着実に進展してきているが、実は、本書のようにそれらの成果を十二分に取り入れた上で、歴史学の立場から浩瀚に論じ、ギリシア本土全体をローマ帝国の史的展開の中に明確に位置付けたものはほとんどない。本書がローマ期ギリシア研究の偉大な到達点の一つであり、今後の研究の進展にも大きなインパクトを与えることは万人の認めるところであろう。